

(……といひつて貰つてしまつた)

二千五十年春。人類は、自分が見る夢を自在に操る」との出来る装置を開発した。

人生の三分の一は睡眠時間だと言われている。その睡眠時間を有意義に過ごすための装置なのだそつだ。人類が過ごす第二の現実。それを思い通りに過ごすためのツールなんだそつだ。

思い通りにならない現実に苦しんでいる人も、夢の中ならば幸せな時間を過ごすことが出来る。

葉月も、現実が苦しくて苦しくて仕方がない類の人間だった。

学校で他の生徒とつまみ「リモートケーション」が取れなかつた」とにより不登校になり、不登校になつた親と不仲になつて引きこもつになつたのだ。

「好きな夢を見る」ことが出来る装置は、数年前まで貰つていた自分のお年玉と貯めていたお小遣いを合わせたもので買った。税と送料込みで四万九千八百円。決して安い金額ではないのでもつ葉月の貯蓄はほとんどない。だが、「れで今日から好きな夢を見る」ことができる生活を送れるのならば問題ない。

引きこもつの貰い物手段はネット。引きこもつてるので受け取りは家族の誰かだが、気を遣つてか葉月死の荷物はそつと部屋の前に食事と一緒に置いてくれている。

葉月の家族は母親と父親と兄の三人だ。父親は元々あまり家庭を顧みない人間だったので葉月が引きこもつても何もする気配はなかつた。母親や兄の方は数ヶ月前までは葉月を部屋から出せつと努力していたが、全く功を成す様子がないのに諦めたのか、最近では話しかけてくる様子すらない。

(どんな夢を見よつか)

仕組みは全く分からぬが、装置を操作して見たい夢の内容を入力すると、その通りの夢を見ることができるみたいだ。

見たい夢なんてたくさんある。億万長者になつて豪遊、ゲームの世界で最強のプレイヤーとなつて他のプレイヤー達の羨望を集める、超絶イケメンになつて美女を侍らせる、等々……。

「これから夢なんて毎日見るのだし、迷う必要なんてない。それでも、一回目に見る夢つていつのはじつしても迷う。

(……僕の望みとくれば)

パチパチと装置についた小さなキーボードを操作し、見たい夢の内容を入力していく。

Enterキーを押すと『OK』の表示が出る。頭に付属のヘッドフォン型の装置を付けるように指示が出る。このヘッドフォンは耳と目を覆う部分についているもので、装着してしばらくすると、特殊な電波が耳と目を通して脳に送られるらしい。その電波が何らかの作用を起して、好きな夢を見せるというものの、ひじょうのだ。

葉月が望んだのは、葉月が送りたかった人生。

否定される「ことのない、誰か一人を生贊に捧げる」ともない、優しい世界。

(僕は、人生を取り戻すんだ)

科学が生み出した最新の機械に期待を込めて、葉月は目を閉じる。

前頭葉に細かな刺激を感じながら、この日のために昨日から取つていなかつた睡眠を貪つた。これから素晴らしい世界に行くことができるという希望を持つていて、からか、静電気のような違和感すらも甘い刺激に感じられる。

目を閉じてしばらくはどんな夢を見るのだろうかなどと想像していたが、やがていつの間にか意識をなくしていた。

気が付くと部屋の前に立つていた。

「一体何をしていて部屋の前に立つ」となつたのか記憶を辿つてみると、特に何も思い浮かばない。大方出掛けるかトイレのためか食事のためかで部屋を出でおり、戻つてきたところだつたとかそんなところだらう。

見事なまでに現在より前の記憶が消えてしまつていて、一体自分は何をしていたのだろう。

「あれ。葉月どつしたの」

不思議なことに首をひねつて「この葉用に、隣の部屋の住人である兄が声をかけてくる。

パジヤマ姿でタオルを首に巻いている」とから察するに、風呂上がりか。どうやら自分も風呂に入らうとしたところで何かを忘れて取りに来たのかといつ推理に辿り着く。

「ちよつとタオルを忘れて……」

「タオル? 汗でもかいたのか?」

「いやちよつと風呂に入らうと思つて」

「風呂なら俺が入る前に入つてただろ。ほけてるの?」

「風呂はすぐに入つていたのか。

なぜパジヤマを着ていなかつたのか。風呂に入つたらしい數十分前の自分を恨んだ。パジヤマを着てくれていれば、風呂に入つた後だとすぐに分かつてぽけたことを抜かさなかつたといつ。

やういえば体も何だかさらさらしている気がする。首の辺りも何だか粉っぽくて柔らかい匂いがする。まさかベビーパウダーでもはたいたのか。自分は別にベビーパウダーを使う習慣はなかつたはずなのが。

（まあ肌に悪いわけじゃないからいいか……）

「やういえばお前宛の荷物届いてたけど、新しいゲーム買ったの? お前ほんとゲーム好きだなー」

「へー・荷物?」

荷物といふば好きな夢を見る」とのできる機械を買った覚えしかない。

（ああ、なるほど）

「世界は夢の中の世界なのか。それならば部屋の前に立つて以前の記憶が全くないのも頷ける。何せ自分は部屋の前に立つ以前は布団に入つて田を閉じたのだから。もしかしたらこの夢の前に何か別の夢を見ており、その夢を覚えていないといつ可能性もあるが、まあ好きな夢を見る」とができる機械を使つて、以上の可能性は薄いだろ。

（あれ、こんな夢になるように操作しただけ?）

確かに自分の望んだ夢は、『人生をやり直したい』といつものだった。

本当は引き」もりなんとしていたくない。確かに他者の田や者で「こと」を「気にしなくて良い生活は楽だが、状況は耐えられない。だが外に出る勇気など持てない。今更家族が自分を好きになつてくれるなんて考えられないし、何より引き」もりの原因になつた学校に再び行く勇気など持てるはずもない。

なので、せめて夢の中だけでも、学校で嫌われずに引き」もりにならなかつた自分になりたかったのだ。
いわざり学校で人気者になつた夢でも見るものかと思つていたが、夢の中でも家の中にいるのか。

（まあ、兄貴が前みたいに普通に僕に話しかけてくれてるし、俺の送りたかつた人生にはなつてゐる……のかな？）
「え？……お前、今日はリビングで飯食つよな？」

「え？……ああ、うん……」

夢の中とはいへ、数年ぶりに他人と食事をするのは抵抗を感じる。

「世界の自分は、他者と食事をする」と全く抵抗を感じないといつのが普通だなう。」

そんな葉月の躊躇いなど気付かない様子で、兄はリビングに歩いていく。

階段を降りてリビングに着くと、ほわほわと湯気の立ち上るおかずがテーブルの上に置かれていた。「飯は自分達が席についてからみたいで、まだお茶碗は置かれていない。

父親は席についているものの、まだ食事は行つていない。少し湯気がなくなつてゐる食事を前に、新聞を広げている。自分達が席についてのを待つてくれてゐるのか。自分の記憶の中の父親はいつも家族を顧みなかつたといつのに、じつして待つてくれてゐるのを見ると不思議な感覚がある。

母親は人数分のおかずをテーブルに置いた後、お茶碗に「飯を盛り始めた。葉月と兄も来た」とだしていふとか。

「じゃあ皆揃つた」とだして、いただきます」

葉月と兄が卓につき、お茶碗が置かれた後に母も自分の分の「飯をお茶碗によそつて机に置く。そして席に着くと、両手を合わせた。父や兄も同じようにしていたので、葉月も倣う。

家族で食事を囲むなんでもう一年ぶりぐらいか。そもそも両手を合わせてから食事を取ることすら久しい。最近はPCやゲームをしながら食事を取つていたので、食事をするところよりも餌を摂取しているといつ方が気分的に近かつた。嫌いなものが入つてゐる場合はさすがに分かるが、少しごんじ、焦げていても、はたまた少しつつもよりおいしくできていたとしても、味の違ひなんて分からない。

食事に集中していなかったが、それとも一緒に食事をする相手がいるせいか、ほんの少しでもよつねじく感じられた。

「葉月さん」飯を食べるなって、何ヶ月ぶりだろ？

「へ？」

「お前が三日前によつやく部屋から出でました俺に声をかけた時、めちゃやくやびっくりしたけど、やもつすげえ嬉しかったよ」

「…………？」

何ヶ月ぶり。

一体何ヶ月ぶりとなのかな。この世界の自分は、現実世界の自分と違うし、人間関係におこしてしまって送つてははずではないのか。

（……いや待て）

自分が打ち込んだのは、『人生をやり直した』ところのみだつた。

それだけで自分はやり直した後のハッピーな世界で生活できると思ふ込んでしまつてたが、実はやり直すチャンスを与えられただけであつて、まだやり直せてはなつのではないか。

むしろ最初の一歩を踏み出したといひドバーンを渡してしまつただけでも、儲けものなのかもしれない。

「いや、そもそも『やり直す』よりも飽きてきたかな？」

苦笑いつつ「飯をかき」。

この返答が合つたのかどうか全く分からない。わひと土に座する勢いを見せなればならなかつたかもしれない。仄諦めかしていつごの場合にやなこのかもしれな。

家族の反応を恐る恐る伺つと、兄が『だよなー』と笑つてくれてたのが見えた。

父親と母親の顔を見てみても、大きな表情の変化はないものの、別に負の感情を抱いてる様子はなさうだ。

自分が部屋の中に居たいもつていたい理由の大きな要因は、他者から否定され疎まれる』ことを恐れたからだ。やえに顔色を普通以上にうかがつ癖がついてる。

相手を嫌な気持ちにさせるととなく会話をきたのは葉月にとっては大きな一歩だつた。

（あー。確かに人生やり直すつて）「へい？」じだよな

確かに好きな夢を見てくれる装置は、葉月の望み通りの夢を見てくれてはいる。

それにしてもリアルな夢だ。夢の中というのはあまりリアルな感触は感じない傾向にあつて、そういう気がする。夢は記憶の整理と言われてゐるため、特に自分が経験した」とのない感覚に感じては、やつこつ」とが起つて、前に夢から覚めるか、夢の中で不思議と避ける」とになつてゐるかのいずれかだ。

それにも関わらず、あまり食べないタイプのおかずの味もしつかりと認知できている。嫌いではないが好きでもない、甘辛い食べ物だ。

だからか、何となく自分が「うしてやり直しができている」とか、「なあ——」

そこで夢が途切れで暗転する。

気付いた時には、目の前が透明感のある黒で覆われていた。

それが寝る前に取り付けた、自分の望む夢を見るための装置であると気付いたのは、数秒経つてからだつた。

重いヘッドフォンを取り外すと、額にじつとりと汗が滲んでいたことが分かつた。頭を覆つているからか、それともリアリティを感じられる夢だつたからな

のか不明だ。

カーテンで窓を覆つておる」とを差し引いても、部屋の中がやけに暗い。完全に電気を消してしまつてこないから暗いオレンジ色の闇であるものの、とて

も朝とは思えないほどの暗さだ。

一定時間以上の放置により暗くなつていたPCを、マウスを動かす」とにより動作させて時間の確認を行う。予想通り、一時と朝にはまだ遠い時間だつた。

いつもなら学校に遅刻となる時間まで寝てゐる葉月にしては珍しい」とだ。装置の効果を早く確かめたため早く寝たからか、それとも慣れな

い装置を頭につけて寝たからか熟睡はできていなかつたようだ。

そもそも自分がどんなものだつか知覚できる夢を見る時間ところのは、起きる直前の」といひつ。だから「自分が望む夢を見ゆる」とのやかたの装置といつのは、どういった理屈なのかは「これまた不明だが起床直前の眠りの浅い時間を作り出していくのだぶつ。

(ねむ……)

そのせいか、しっかりと体を休められる眠りを摂取できていよいよと思われる。

ま、自分でその状況を作り出したと分かつて「いたとは言え、」やけにリアルな夢を見たせいもあるかもしれないが。

悪くない感覚だったが、「れでは体が持つとも思えない。」本田一度田の睡眠は、装置を外して取る」と決めた。

次に目覚めたのは、すでにお昼も回っている時間だった。

起床時間が昼の一時だからか、部屋の前に置かれているのは朝食のメニューではなく、昼食のそれだった。

汁物が一つとタンパク質のおかずが二種類、野菜を取るためのおかずが一つと「飯だ。いくら母が専業主婦とは言え、葉月が引きこもる前も引きこもつた後もずっと」との量を作っている母には感服する。

(考ふてみれば、ウチつて結構料理のクオリティ高いよな)

昨夜の夢のせいか、本日は動画などの他のものに気を取られながらではなく、食事に集中する。

実に一年ぶりぐらいに味わった母の料理は、ネットで騒がれている飯マズやダニア嫁のそれとは程遠いものだった。引きこもりの息子に出すにはもつたいないと自分でも思える。

思い返してみれば、今はなくなってしまったが「引きこもつた当初は食事を乗せたお盆に小さな手紙も添えられていた。その当時は開く気にすらなれなかつたので、見づに破いて捨てていた。手紙を乗せていてもリアクションがなかつたからか、もしくは「ハハ」袋の中から手紙の破片を見つけたからなのか、何日か続いた手紙もそのうち乗せられなくなつた。

考ふてみれば一年も引きこもりが続いている息子に食事を出しているのは破格の待遇だと思える。葉月の大好きな大体の電子世界の人々も、大体穀潰しは減びるべきだと考ふているのだから。

自分は一体何のために生かしてもら正在していのだろうか、と考える。葉月の家は、生きている人間といつだけでも利用価値がある時代を生きているわけでも、そんな場所で生きているわけでもないはずだ。

となると、放置により殺した」とにより自分達が咎められる」とを嫌がつているのか。その節が最も有力と考えられる。

(……さすがに、まだ情があるとは考えにくいよな)

まだ葉月に愛情があり、部屋から出て社会復帰する」とを期待してくれるといつ可能性も、ないとは言えないが非常に低いと言えるだろう。漫画やゲームでは良くある話かもしれないが、現実は葉月の幻想の中だけの話と言えそうだ。

そう、あれは夢なのだ。親からせひつたお金で購入した、現代科学の産物により生み出された、葉月の願望だ。自分の望み通りに変える」とひのどき、第一の自分の世界での出来事なのだ。

(さて、今日は何の夢を見ましようかね)

装置を前に、どんな世界で過る」したいかを思案する。

きっとゲームの中の世界に行つてみたいとでも指定すれば、自分の大好きなゲームの世界でスリル溢れる生き方ができるのだろう。美少女と恋愛してみたいとでも打ち込んでみれば、現在自分が最も可愛いと考える芸能人やキャラクターに愛されるといつ、それこそ夢のよつな経験ができるのだろう。昨夜打ち込んだ内容は非常に短くてシンプルだった。しかし装置に入力できる文字数は五千文字と非常に長い。丁寧に指定すれば、自分が見たい夢を確実に見る」ことができそうだ。

三十分ほどネットで色々なものを調べたりして悩んだ挙句、結局選んだのは昨夜と同じ内容だった。

昨夜の内容は別に悪いものではなかつた。どうよりも、きっと自分が心の底で望んでいるのは、きっと昨夜のよつな世界なのだとも思える。自分が一番やりたかった」とは、平和に学校に行つて、家族と何のしがらみもなく「普通に一緒に過る」す」とだつたのだから。なので、本日も第一の現実にやり直しをしに行く」とにした。

気が付くと、隣に兄がいた。

前回と同じ今回と同じ、いつも兄が一番メインで出でてくる。どれだけ兄が好きなのか、という感じだ。特に家族の中で誰が一番好きといふことはなかったはずなのに。

（あー、でも兄貴が一番僕のことを最後まで諦めないでいてくれたもんな）

葉月が部屋から出なくなつた時、母親が諦めてしまつたと思わしき時以降でも、優しく説得しようとしてくれていた。

むすがに半年経つた辺りから関心そのものが薄くなつたが。今ではもう葉月に対する興味は持つていらないだらうと思つ。

今自分の横にいる兄は、まだ自分のことを気に掛けさせてくれていた頃の兄のように思われる。

そして田の前にあるのは対戦型アクションゲームだ。画面が半分に分かれている、それが制限時間内にどれだけの難敵を蹴散らせるかを競うゲームである。なお、プレイヤー同士による妨害ももちろん存在する。

葉月は現実世界でも」のゲームをやり込んでいた。ただし引きもつた部屋の中でプレイしていたので、リアルな知り合いとの対戦ではなくネットの海に向こうにいる見知らぬ人との対戦だが。

そんな自分と、ゲームを普段やらないはずの兄が対戦をしているなど、何だか不思議な気分だった。

数回体差と、圧倒的な格差を見せつけて勝利を収めると、兄が悔しそうな顔で「ノンアローフォーをクリア」の上に投げ出した。

「うあー……やつは強いなあ葉月……」

「まあー」¹と田ぐら、一田二十時間ぐらうやる勢いでやり続けてたからなあ……」

「弓き」もりつて怖い……」

もう一度やる気力はなかつたようだ、兄は完全にゲームから手を離していた。

それにしても、葉月の知る兄はおよそゲームなどやらない人間だつた。ゲームをやるぐらうなりば、その分の時間を睡眠に当てる人間だ。

それなのに一緒にゲームをやる」とになつた経緯は、一体何なのか。

夢というのは大体が途中から始まるものなので、物事に至つた経緯などが分からぬものばかりなので困る。まあ中には、経緯がいつの間にか記憶に植え付けられているものもあるが。

「兄貴、何で僕とゲームする」になつたんだうけ」

まるでいつかの「」とを覚えてなく、」にボケたか、と心配したような顔を向けてくる。まあゲームをする直前にじいちゃんがゲームをしたいのか、」と予想できるので、仕方ないと言えど仕方ないのだが。

それでもまあ、残念ながら今の葉月自身は覚えていない。」か全く分からぬのだから仕方ない。

「お前の趣味に関与して、お前の」ことをもつと理解できたが、もつとお前の力になれるかなつて思ったからだよ」

「え……」

「未だ」おで自分の」とを考へてくれて、」とは露ほども思ひていなかつた。さすがにそろそろ諦められて疎まれていとおかしくないと、兄を見るたびに思つてした。

「……充分、力になつてくれてよ」

現実の兄も夢の中の兄と同じように思つてくれて、」だらつか。

葉月の力になつて、葉月が部屋から出て元気になる」とを望んでくれて、」だらつか。

「あー、腹減つたなあ。甘味食べに行」つぜ甘味一

「え……。最近甘いもの食べ過ぎて太るかなつて思つたから控えてたんだけ……」

まあ、それは現実世界の話なのだが、そして控える」と、部屋の前に置かれていた食事のうち、糖分の多いものは手をつけずに、使用済みの食器とつて部屋の前に返していただけのだが。

「んばガリガリ」の体で何言つてんだよ。もつと食え食え。そして動いて筋肉つける。食わねえと動く気力すら出でないだ

まあ、とは言つても食べても血にも肉にも脂肪にもなり得ないわけなのだが。

」がりアリティがあり過ぎで、これが現実なのではないかと何度も錯覚してしまつ。自分が太る」とを気にして、今この場では言わなくてもこゝはやだ。しかも何となく言つ方方が女子つまつ。

兄に手を引かれて階下に行く。ガリガリで運動もしていない葉月は、適度に食事も運動もしてたましく育つている兄の腕力には敵わず、引きずられ形となつた。

「お母さん。甘味何かない？」

「もう少し」飯だから、ちょっと我慢してね」

「いやあ、葉月ももつと太らせないと外に出る体力つかないし」

「葉月をタシに使つべじやな」

「血ひたかつた」とを母が代わりに言つてくれた。さすが家族。血が繋がつてゐるだけあつて思考が似ている。その間に兄とは別思考だが。

断りつつも、冷蔵庫から透明で薄い水色の食べ物を出してくれた。白い粉がつていた」とから、「これがネットで一時期少しふ話題になつた、ソーダわらび餅かと判断する」とができた。

「何だかんだ言つても、」の母親は子供に甘い。といつか可哀れもりを許してくれてゐる時母ですでにグロ甘だと分かる。

「じただきます」

白い粉をかけ、爪楊枝を刺してわらび餅を口くと運ぼうとする。母が自分の方を見つかる」とに気付いた。嬉しそうな、愛おしそうな顔だ。

「おじいさん、」

「あ……。うん……」

何だか恥ずかしくて俯くしかなかつたし、声も小さくなつてしまつ。

「葉月。お母さんは、葉月が本当に辛いならば外に出なくてよいと思つたのよ」

「……わうんなの~」

「それでも、勇気を出して外に出て、また樂しく生活してくれるな、お母さんせやひぱりそつちの方が嬉しい」

優しい声で言い、葉月の頭を撫でる。

母親とは何とあたたかなものなのだろう、と再認識する」ことができた。

まだ家から出でているわけではないので、完全なる社会復帰とは言えない。そもそも夢の中で社会復帰だなんて言えないだろう。そもそも一度田の夢では元々部屋の外に出ていたし、今回は兄に手を引かれてリビングに来た。別に白いの力で母親と会話をするに至つたわけではない。

それでも普通の生活の片鱗を享受する」ことができて、大きな進歩をしたことを感じる」ことができた。

(……夢じやなくとも、お母さんや兄貴は僕をあたたかく迎えてくれるのかな)

現実世界でも同じように部屋から出で、久し振りに兄や母と会話をしたら、どんな反応をするのだろう。

もがん夢の中のよつとせつめくいかないだらう。そもそも風呂に入つた直後に兄と会話つゝとや、兄が自分の部屋でゲームをしてる。ナムコ一シヨンなん到底あるとは思えな。ナムコ一シヨンを取るのが久し振り過ぎて、困惑せてしまつ可能性だつて大いにある。

それでも、今日の前にいる兄や母が「こんなに優しく自分を迎えてくれていいのだから、きっと悪いことはないだらう」と思った。もしも何を今更、という態度が少し見えたとしても、時間をかければ何とかなるのではないかという希望を抱いていた。

(夢の中をイメージトレーニングの場所にして、リアルは実践の場……つい組み合わせもいいかもな)

一日田も、やはりヘンダフオンをつけた頭はじっと濡れてい、髪の毛も少し額に貼りついていた。

本日は先日と違う、長時間眠り込んでしまつていたようで、カーテンからすでに光が漏れて汚い部屋の中を照らしていた。読みかけて放り投げた」とにょりぐわやぐわやになつた漫画や、鼻をかんでそのまま放置していた丸めたティッシュゴミが床に散乱しているのが見える。

改めて部屋の汚さにげんなりした部分があるが、それよりも前に風呂に入りたくなつた。頭と背中と足のふくらはぎと太ももの間の辺りに汗が滲んで気持ち悪い。

風呂をじつしたものかと悩む。誰かに会う可能性が高いので、「こんな時間に部屋の外に出て入浴しようと思つた」となんでもない。かといってそのまま放置していくは気持ち悪いし臭い。そして引きこもりが汗拭きシートなんていうおしゃれなものを持つているわけがない。

いつもなら絶対に「まかしつつもうひと眠りするか、服を脱いで乾燥するまで待つていた」と云つた。しかし、本田は夢見がとても良かった。

(本音)、部屋の外に出てみようかな

無理なら無理で、また部屋の中に戻ればいいのだ。

さすがに夢の中はじつまくこくものだとは思つてこなかつた。

しかし、心がけ次第で最良にできるだけ近づけることができると信じてこた。

かの信じられるよつてになつたのは、ひとえに夢のおかげだらう。

人間じゅしても、自分に都合のいいものを信じたくなるものだ。それが自分の望みが作り出した幻影だとしても、肌で感じてしまつたらもつただの幻想とは割り切れない。

鍵を開け、ドアノブを回す。夢では」の部分は省略されていたので全く分かつていなかつたのだが、最初の一歩といつのは何と勇氣のいるものなのだから。

しばらく体が動かなくて、ドアノブを握った体勢のまま固まつてしまつ。皆が寝静まつた頃に触るドアノブとは違い、本当に重いものに思えた。

(……しつかりしるよ僕。たかが外に出るだけだぞ)

まあ、そのたかがができるいなかつたから一年も引きこもつていたわけなのだが。

しばらく戦闘したが、どうも自分はドアをきちんと開ける」しができやうにない。なので、もはドアノブを回すだけにして、ドア本体は自分の体の重みで開ける」とした。

何とかドアノブを回し、倒れ込むよつにして外に出る。勢いが良すぎてドアが壊れてしまつかと思つたが、ドアは勢い良く壁に当たるだけに留まつた。その代わりに葉月自身は床にダイブしていた。

「うお!?

ダイブした瞬間に聞いたのは、葉月が聞いた」とのない男の声だつた。たかが一年では、兄や父の声は変わるはずがない。そもそも兄も父も声変わりは過ぎてゐる。

顔を上げると、見覚えのない顔がそこにあつた。そりで初めて、誰か別の人気が家に訪ねてきつたのか、といつ考へが頭によがひる。顔を上げると、やはり知らない男の人と、そしてその男の人の後ろで青ざめてゐる兄の姿が目に入つた。

兄の友達が遊びに来たといつたのだからか。といつ」とは挨拶をすべきか。

「あ、じつも」へにちは。僕は「この親戚の子供だから、今たまたま預かつてたと」でー。」「

葉月が全て話しつわらないうちにかぶせてきて、葉月と相手の男の人は目を丸くする。

葉月自身は兄がどうしてそんな嘘をつくのか、と混乱状態に陥つていたし、兄の友達と思わしき男の人は突然葉月の言葉を遮つた兄を不思議に思つていた。

「腹でも減つたのか? 冷蔵庫にロールケーキ入つてゐるからそれでも食つとけよ」「え。う、うん……」

「」の場からいなくなつて欲しいといつ零困気を漂わせている兄の様子に気圧され、葉月はおとなしく階段に向かう。

そんな葉月から逃げるよつて、兄は友達を連れて自分の部屋に入つていた。

（……もしかしなくとも、外に出ちゃまずかつたかな……）

すでに心が折れそうだったが、「」で諦めてしまつてはもう一度と外に出る」などがやきなやうだったので、心を奮い起して階段を降りる。

それに確かに空腹ではあつたのだ。最近なぜだか昼間食事が部屋の前に置かれていない時もある。そして本日はちょうどその日だった。

もう葉月に愛想を尽かして食事を出す気力すら失せたのかとも思つたりしたのだが、一週間のうちの決まつた曜日にしかその食事が出されない日は訪れない。

一体何の法則なのか疑問が募るばかりだ。

その疑問がまさか本日解消される」とになるとは、階段を降りている時には夢にも思わなかつた。

（…………～）

階段を降りている時に葉月は、知らない男の声が聞こえた」とに首を捻つた。

兄の友達は兄の部屋に入つて行つたので、さすがに彼の声が聞こえたとは考えにくい。それに声のする方角が階段の上ではなく、下なのだ。何より、声が若い男のものではなく、ある程度歳をとつていた。

（……お母さんか、お父さんの知り合いかな）

今まで平日は昼間に両親の知り合いが来た」とは本当に数えぬほどしかなかつたので、大層珍しいと思つた。
大事な話をしていたらどうしようかと思いつつも、冷蔵庫からそつと食事をいただくだけならまだ大丈夫かとも思い、キツチンに向かう。
「……は？」

キツチンに向かう途中にリビングがあるのだが、そのリビングで葉月は信じられないものを田撃し、思わず声が漏れてしまつた。
見知らぬ男と中年の女が抱き合つて、熱烈な口付けを交わしていたのだ。しかもその中年の女は、葉月の良く知る人間だった。
男が見られてくる」とに気付き、勢い良く中年女——葉月の母親の体を自分から剥がす。母親の方が名残惜しそうな様子を見ると、母親の方が相手にゾッコンなのか。

「……何だ？」お前」

見知らぬ男の方が葉月に声を掛けてくる。それによつて誰かがいる」とに気付いたのか、母が葉月の方を見た。それで青ざめる。

「……お前、誰だ？」

「Nの人の……息子」

「ふーん……。」の前会った奴と違うな？それに……息子は一人つて聞いてたんだがな？」

葉月の方を見ずに、母親の方を見ながら男が言つた。

男の返答によつて、母も自分の存在をなかつた」としていたのだといつたが何となく分かつた。

「金はいはいもひても、さすがに、詫ありのほい息子を持つ女とは付き合つていけねーわ。じゃーな」

「ー待つ……」

縋る母親の手を払いのけ、男が家から出て行く。

お金。母親はお金を払つてあの男と付き合つていたのか。

葉月の知る母親は、そんなことをする人ではなかつた。父親とはそれほど仲がいいとは思えなかつたが、不倫をするほど壊れた夫婦関係でもなかつた。

葉月が引き「もつて」いたの一年の間に、何かが起きてしまつたのだろうか。

それとも、葉月が引き「もつた」とによつて家庭が壊れてしまつたのだろうか。

「お母さん……」

ソファに座り、床を虚ろな目で見たまま動かない母親に声を掛けると、虚ろながらも憎んでいるような視線を葉月に向かた。

「お前は何処まぐ、私の幸せを奪へば気が済むの」

葉月が固まつていると、母親は葉月が引き「もつて」数ヶ月経つてからの自分の人生を語り出した。

葉月が引き「もつて」ことで周囲の人々から陰口を多く叩かれるようになつた」と。父親からお前の教育が行き届いていないからだ、と責められ続けた」と。そして兄も数ヶ月前に大学に上がるまでは陰口を叩かれ続けた」と。

「お前なんて、いなければ良かつた」

(……ああ、やっぱりあの夢は、ただの夢でしかなかつたんだなあ)

現実は、自分はもう人生をやり直す」となど、不可能だったのだ。

（終）